

阪神・淡路大震災と4年間向き合って



神戸大学大学院人間発達
環境学研究科 准教授
齊藤誠一

(さいとう せいいち)

Profile — 1985年、筑波大学大学院博士課程中退。上越教育大学助手、神戸大学教育学部講師、助教授を経て現職。専門は発達心理学。



和歌山大学教育学部
准教授

則定百合子

(のりさだ ゆりこ)

Profile — 2008年、神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程後期課程修了。武庫川女子大学博士研究員、和歌山大学教育学部講師を経て現職。専門は臨床心理学。

現在、筆者らは「東日本大震災の心のケアに関する長期的研究」を進めており、その参考としてかつて行った「児童・生徒に対する阪神・淡路大震災の心理的影響に関する縦断研究」を再検討しているところである。この縦断研究では、図1に示す通り、被災地域にある幼稚園、小学校、中学校の児童・生徒と保護者を対象に、震災から1年が経過した1996年3月から2000年1月まで約4年間にわたり、7回の調査を実施している。本稿では、これを例にあげて、研究を進めていく中で遭遇した問題を示しながら、コツらしきものを述べることにする。ただし、本研究は震災を契機にあまり準備もないまま始めたので、厳密に計画された通常の縦断研究とは異なることをあらかじめお断りしないとならない。

震災直後、齊藤の所属大学では兵庫県南部地震に関する全学プロジェクト（95～97年）が立ち上がり、本研究もこのひとつとして計画された。ちょうど改組して間もなかったため、学部の特徴を生かした研究をせよとの意向もあり、上述のテーマでひとまず2年間の縦断研究とした。しかしながら、これまでにモデルとなる震災研究はほとんどなかったので、

被災時の学年	第1回 (96.3)	第2回 (96.7)	第3回 (96.10)	第4回 (97.3)	第5回 (97.10)	第6回 (98.1)	第7回 (00.1)
年少	年中		年長		小1	小2	小3
年中	年長	小1			小2	小3	小4
年長	小1	小2			小3	小4	小5
小1	小2	小3			小4	小5	小6
小2	小3	小4			小5	小6	中1
小3	小4	小5			小6	中1	中2
小4	小5	小6			中1	中2	中3
小5	小6	中1			中2	中3	高1
小6	中1	中2			中3	高1	高2
中1	中2	中3			高1	高2	高3
中2	中3	高1			高2	高3	大1他
中3	高1	高2			高3	大1他	大2他
研究費	全学プロジェクト 科研基盤 (C)						附属機関 プロジェクト

図1 調査概要

()内は調査年月

当時盛んに言われ始めていた「心のケア」「PTSD」などを視点においた。

まず、幼稚園から中学校までの児童・生徒と保護者を対象とした縦断データ収集が可能な教育機関を探し、交渉することとなった。実際に、各学校の担当教員に研究目的、意義、協力をお願いしたいことなどを説明してみると、予想外に抵抗が強く、被災を受けた子どもたちにとって、どういうメリットがあるかなどを問われ、苦しいやりとりとなった。交渉の末、幼稚園1園、小学校と中学校各2校から了承が得られ、各学校の研究担当の先生にも共同研究者になってもらい、研究が始まった。

コツ1 協力予定者との出会

い：飛び込みでも、人づてでも、学校やグループ活動などを通じてでも、まず協力をお願いできる機会を得なければ始まらない。「初対面の相手に電話をして、アポを取る」という当たり前のことが第一のハードルといえる。Eメール万能時代でも、電話できちんと伝えられることは必須条件である。

コツ2 内容説明と協力要請：相手にとっては本研究によるメリットもほとんどなく、場合によっては生活を乱すことにもなるので、断られても当然。研究の意義を説明し、あなたにしかできない/あなたに是非お願いしたいことを伝える。協力の際の負担と利益を説明するとともに、倫理的配慮を伝え、検討をお願いする。ここでも電話以上に礼儀、言葉遣い、表情

や受け答えなどが重要である。

コツ3 共同研究者への誘い：本研究は学校が間に入って、児童・生徒と保護者に調査をお願いしたので、各学校から一人ずつ共同研究者に入ってもらった。これにより、その後のやりとりがスムーズになり、教師、児童・生徒、保護者のナマの声を聞くこともできた。

ところが、研究費がさほど多くないため、児童・生徒と保護者を合わせて2000部以上の調査用紙の印刷、製本、クラスごとの袋づめなどを大学院生や学部生に手伝ってもらい、協力校に届け、受け取る時は自分で車を走らせた。また、1500人を超えるデータ入力でも大学院生や学部生の協力を借りざるをえず、これ以降私のゼミではきつい作業が待っているという評判が立つことになった。さらに、第2回調査から卒業生には郵送する必要が生じ、郵送料がかなりのコストになることが判明した。結果的には、最後まで人手とお金の苦労は絶えなかった。他方、調査協力者に対する配慮として、メンバーに三人の臨床心理士がいたので、質問紙の最終ページには電話相談も受け付ける旨を記載した。さらに、結果報告について何回か主な結果を各学校に返し、協力者への伝達をお願いするに止まったのは反省材料である。

コツ4 人手の確保：質問紙の作成や運搬、データの入力や分析などは外注できれば問題はないが、研究費が多くない場合には大学院生などの力を借りることになる。研究協力者として、研究に参加してもらいながら、データ入力や分析などを手伝ってもらえる人手は必要である。協力してもらえる大学院生を長期間一定数確保することも重要である。

コツ5 研究費の確保：残念な

から縦断研究はやる気だけではできず、それなりの研究費が必要である。本研究では当初学校で質問紙を配布し、家庭で回答の上、郵送での返却を求められたが、1回で20万円程度が見込まれ、それだけで当時の研究費の大半を使ってしまうので、なんとか考え直してもらった。調査であれば質問紙作成費用、送料、データ入力の謝金などが毎回必要であるし、実験や観察であれば来てもらうため、あるいは訪問するための交通費が毎回必要であるほか、実験機材、撮影機材などのインシヤルコストも必要となろう。大学から配分される個人研究費が潤沢であれば、長期的な目処も立ちやすいが、必ずしもそうでない場合は科研費など外部資金を数年間分獲得しないと研究の継続は難しい。

コツ6 データの蓄積：どのよう個別データを保存していくかも重要。本研究では同意の上で氏名を記名してもらえたが、近年では個人を特定できる情報を質問紙に残すことは難しい。数回にわたる縦断研究の場合は、当然同じ協力者のデータを結合しなくてはならず、そのための識別変数が工夫されなくてはならない。長期にわたっても変化のない情報を使わないとならないので、誕生日、電話番号の下4桁、血液型などを組み合わせることが多いが、これらも個人情報の一部であるので、注意が必要である。

コツ7 データの保管：本研究が始まった当初はまだフロッピーディスクで保存することが普通であったので、データのマスターディスクを作成し、処理にはそのコピーを使用した。フロッピーディスクの容量は小さく、1枚のディスクにすべてのデータが保存できず何枚かになったが、現在ではた

いての調査データはUSBメモリ1本に保存できる。しかし、実験や観察の場合には、数値データだけでなく、生理的指標、画像や動画など膨大なデータとなるので、保存と保管には注意が必要である。個人情報外部に流出しないように安易なデータのコピーは避けるべきであろう。

当初は各学期に1回の調査を考えていたが、実際に行ってみるとかなりの仕事量になり、他の業務への支障が予想されること、定期的な調査が必ずしも適切なタイミングではなかったことなどから、時期によって間隔が異なることになった。科研費最終年度で一旦終了したが、一つの区切りである震災5年目に調査が実現でき、少なくとも資料的価値がある成果は残せたと思っている。

コツ8 情報の発信：本研究の場合は、震災後の時間経過と心理的影響の関連が重要なテーマであったので、直近発行予定の大学紀要への投稿と、日本教育心理学会などでの発表を課した。すべてのデータが揃うまで検討できない場合は別として、毎回のデータにきちんと目を通すことも意味が大きい。

縦断研究は口で言うほど容易でなく、期待するほどクリアな結果が得られないことも多い。しかし、質問紙調査でも顔は見えないながらも、一人ひとりの人生に伴走させてもらっている魅力があることも確かである。

